

副学長 木村繁男先生 推薦図書 推薦文 第1回 ～ 第7回

副学長 木村先生推薦図書 パート 1

「流れといのち」

The Physics of life

— The Evolution of Everything —

著者 エイドリアン・ベジャン (Adrian Bejan)

訳者 柴田裕之

解説 木村繁男

2019 年 5 月 紀伊國屋書店発行

著者 Adrian Bejan は 1948 年ルーマニアに生まれる。現在、米国 Duke 大学 J.A.Jones Distinguished Professor であり、熱力学の第二法則に基づく熱設計の最適化という分野を切り開いた鬼才として知られている。90 年代半ばに、マクロな現象を説明する物理学の第一原理として「コンストラクタル法則」を提唱した。以来、万物の構造を決定する原理として、この法則を縦横無尽に駆使し、生物の進化、社会インフラから惑星までも研究対象として、それらの中に形成される構造が何故ある特異な形状を持つのかを解き明かしてきた。しかし私にとってなによりも重要なのは、40 年前の彼との出会いが私の人生を定義したということである。

彼が学生時代を過ごした MIT では「熱力学第二法則の闘士」という異名をとったことでも知られている。「熱力学の第二法則」について彼が語りだすと、恐れをなして皆が逃げ出したとの逸話を残している。しかし、熱力学が持っている制約、すなわち（体）系の平衡状態の存在と可逆的な状態変化という二つの仮定に、彼は最後まで納得できなかったのはいか。なぜなら、世界は非平衡状態に満ちており、その変化は常に不可逆的であるからだ。そして、彼の世界認識は「熱力学」の殻を破り、その思考は「熱力学」の破壊へと向かって行ったように思える。

副学長 木村先生推薦図書 パート 2

読書という旅に出よう

—公立小松大学で学ぶ学生の皆さんに— (パート 2)

「無常という事」—小林秀雄全作品 全 28 集第 14 集—

著者 小林秀雄

平成 28 年 11 月 5 日 第 4 刷 新潮社

我々が学生時代、今から半世紀ほど前になるが、大学では学生運動がようやく下火になろうとしていた。しかし、学内にはまだその余波が感じられ、一部の学生は反体制という政治活動に情熱を燃やし続け、既成社会制度の破壊という行為の正当性を信じて疑わなかった。彼ら政治活動家の間で最もよく読まれていたのが小林秀雄である。学生運動について意見を聞かれた小林は「数だけが異常で、内容が空虚な点で、学生運動は交通事故と同類だ」と述べたと伝わる。なぜこのような小林がよく読まれていたのか不思議な気がする。おそらく青年の純粋な魂が、小林の中に人間としての誠実さを見ていたのかも知れない。もちろん、我々の間でも小林は神のような存在で、「小林秀雄を読まざるものは学生にあらず」と言う勢いであった。

この第 14 集に収められているのは昭和 16 年から 20 年の戦争中に書かれたものである。「無常という事」の他に「平家物語」「実朝」「西行」などが収められており、何れも 20 ページに満たない小品である。したがって、適当なものを選び、1 時間もあれば読むことが出来る。小林の円熟期に書かれたもので、ある人は彼の日本語の美しさに感銘を受け、ある人はその強靱な精神に打たれる。「無常という事」は、「一言芳談抄」の引用から始まる僅か 4 ページの作品である。歴史を知るということは、過去の事象を己の心の中に再構築するというごく内的な行為である。己の心の中に、その時代の日の光、土のにおいまでをまざまざと思い起こす所作である。その人知れず行われる努力、それが歴史を知るということである。彼はそれを「平家物語」「実朝」「西行」で実践してみせたのである。比類のない日本語で書かれたこれらの作品は、文芸評論というより散文詩と呼ぶにふさわしい。

副学長 木村先生推薦図書 パート 3

読書という旅に出よう

—公立小松大学で学ぶ学生の皆さんに— (パート 3)

「モーツァルト」

—小林秀雄全作品 全 28 集第 15 集—

著者 小林秀雄

平成 28 年 11 月 5 日 第 4 刷 新潮社

「モーツァルト」は戦後まもなく書かれたもので、彼の文芸評論の一つの到達点を示す記念碑的作品である。これも全編が散文詩であると言って良い。特に、「レクイエム」について語る最後の辺りは、モーツァルトへの鎮魂歌のように悲しくも美しい。小林によれば、音楽はモーツァルトで頂点を極め、ベートーヴェンがパンドラの箱を開いたがために、その後墮落の一途をたどったということになる。そう極論されるほどにモーツァルトの音楽はとても人間業とは思えない。「音楽はモーツァルトに始まり、モーツァルトに終わる」という人口に膾炙した言葉もそれを暗示しているかのようである。小林流に言えば「人間どもをからかうために悪魔が発明したもの」ということになる。

ベートーヴェンを理解できなかったと言われるゲーテは、新しい音楽に熱狂していた当時の大衆よりはるかに多くをベートーヴェンの中に聞き分けていた。有名なハ単調シンフォニーの出だしを、メンデルスゾーンのピアノで聞いていたゲーテはひどく不機嫌になり、しきりと口の中で何かをつぶやいていたと伝えられる。ベートーヴェンの後に出てくるロマン派作曲家達の悲劇と危険性をいち早く予感していたというのである。

ベートーヴェンの「クロイツェル・ソナタ」を聞いて慄然としたトルストイは小説「クロイツェル・ソナタ」を書いて、この音楽に徹底した復讐を行った。ワーグナーの無限旋律に音楽の退廃を聞いたニーチェは「ニーチェ対ワーグナー」を書いて、ワーグナーに宣戦布告した。ニーチェが発狂する 2 年前である。人生とは何か、美とは何ぞやというようなヤクザな言葉で頭を一杯にしながら大阪の場末をうろついていた小林を、モーツァルトのハ単調シンフォニーの旋律が稲妻のように襲う。この異様な体験を己に納得させるために書いたのがこの「モーツァルト」である。小林は、彼一流のやり方で「モーツァルトの悪魔」と対峙したのである。

副学長 木村先生推薦図書 パート 4

読書という旅に出よう

—公立小松大学で学ぶ学生の皆さんに— (パート 4)

「かくれ里」

著者 白洲正子

2016 年 第 3 刷 新潮社

これも半世紀近く前の話である。世は高度経済成長期で、ようやく人々の生活にも余裕が生まれ、観光が一大産業となりつつあった。バスを連ねた団体観光客が、日本中の名所旧跡にあふれかえっていた。その頃、岡部伊都子の「観光バスの行かない……埋もれた古寺」という文庫本を手に入れて、にわかに救われた気がした。白洲正子の「古典の細道」やここで紹介する「かくれ里」も私のこの方面の趣味の延長線上にある。

「かくれ里」の中心にあるのはいつも産土の社であり、家々の菩提寺である。当時、伊丹に住んでいた私は、これらの本を頼りに中古のスカイラインを駆って近畿一円を走り回った。給料はほとんどがガソリン代に消えた。甲賀の里にある油日神社、宇陀の大蔵寺、今では世界遺産になった高野山近くの丹生都比売神社などはこの本で初めて知った。静寂な境内、その社や古寺を取り囲む集落の風景、背景の山並みなどは見飽きることがなかった。そして、土地に秘められた語られることのない歴史は益々私を離れ難くした。

その中でも特に心に掛かっている場所がある。奈良県吉野の金剛寺で毎年 2 月 5 日に催される「御朝拝式」である。後南朝の歴史に関わる儀式がこの土地の旧家である「筋目の者」たちにより、560 年以上も執り行われているという事実には驚嘆させられた。谷崎潤一郎に「吉野葛」という紀行文とも小説ともつかない作品がある。このなかに後南朝の話があり、「御朝拝式」についても記述がある。しかし、白洲正子の「かくれ里」を読むまでは、どこか夢の中の話のようで現実味がなかった。白洲の作品によって初めてこの土地の歴史、すなわち後南朝の存在というものが生き生きと現代に蘇るのを感じた。「御朝拝式」を一度この目で目撃したいと思うが、あいにくこの頃は入試や卒業研究の業務が重なる時期で、まだその望みを果してない。

副学長 木村先生推薦図書 パート 5

読書という旅に出よう

—公立小松大学で学ぶ学生の皆さんに— (パート 5)

Nobility of Failure

-Tragic Heroes in the History of Japan-

Ivan Morris

「高貴なる敗北—日本史の悲劇の英雄たち」(1981 年) (古)

アイヴァン・モリス (著), 斎藤 和明 (翻訳) 中央公論社

いつも思い出話になるのは年寄りの習性らしい。米国の大学にいたとき、大学院生は小さいながら Office をあてがわれていて、TA の仕事の一環として質問に来た学生に答えることになっていた。近くの Office にエジプトから来ていた El-Akily という留学生が居て、やはり学生の相談にのっていた。彼は嫌英親独の政治信条の持ち主で、エジプト侵攻を企てたロンメル将軍をいたく尊敬していた。ロンメルが敗退したエル・アラメインの戦いについては一家言を持っていた。そういう彼の机の上には、ドイツ軍戦車のプラモデルがいつも置いてあった。何かの拍子に「Kamikaze」が話題になり、なぜ日本はあのような「crazy」で「desperate」な事をやったのかという話になった。今となっては何を話したか全く記憶に残ってないが、きっと「他に効果的な反撃手段を当時の日本は有していなかったからだ」などと答えていたのだろう。しかし、そのように答えながらも「crazy」や「desperate」という言葉だけでは汲み取れない、なにか名状し難いもどかしさを強く感じていたことだけはいまだにはっきり覚えている。

そのころ出合ったのがこの本である。「倭建命」に始まり、日本史上の 10 人の悲劇的死を遂げた人物を扱った評伝である。「楠木正成」「天草四郎」「大塩平八郎」「西郷隆盛」など、敗北することがほとんど自明の理であるにもかかわらず、彼らはあえてその運命を受け入れ戦いに臨む。日本人は、そういう彼らを歴史の中に受容してきたという長い伝統を有している。言ってみれば民族としての美意識がそこにある。それが、最後に取り上げられている「Kamikaze」の底流をなしているというのが著者の主張である。エコノミックアニマルと揶揄されていた当時の日本人が、実はその表層とは全く相反する深層心理を有していることを論証しようとした作品である。「経済的成功しか頭にない日本人」という当時の米国人が持つ日本人観を 180 度覆すものであった。初版本はカナダで 1975 年に出版された。その後、日本の Kurodahan Press が受け継ぎ、2013 年に出版されたものが Amazon から 2500 円程度で入手可能である。かなり綿密な注釈が付いており、全ページの 1/3 に及ぶ。1981 年に中央公論から日本語訳が出たが、残念ながら絶版になっている。現在、和訳の古本は 1 万～5 万円の値が付いている。

私が持っている初版本には「Kamikaze」の章に何枚かの写真が挿入されていて、その中の一枚に見開き一杯に拡大されたものがある。おびただしい弾幕に覆われた沖縄の空の中で、今まさに一機の特攻機が米空母に突入しようとしている。それを呆然として見守る数人の米兵の後ろ姿が左下方に写っている。彼らの背中には憎しみというものはなく、なにか厳粛な儀式に見入っている様子を感じられる。飛行機の爆音や激しい対空砲火の射撃音はすべて消え失せ、深い静寂のみが支配している世界が画面全体から伝わってくる。約 40 ページの最終章「Kamikaze」の言わんとするところは、ほとんどこの一枚の写真に凝縮されている。

El-Akily が博士の学位を取得してどこか田舎の大学へ赴任して行くとき、私に一冊の本をプレゼントしてくれた。「Battle Ships 1856—1977」(written by Antony Preston, Phoebus Publishing Company, 1977) というタイトルの本である。最後の方で戦艦大和の話が詳しく書かれてあったからであろう。表紙の見返しに

To Admiral Kimura of the Yamato:

With Best Regards,

Adm. N.M.El-Akily

(8/11/1981)

とサインしてあった。何回もの引っ越しのために本は大分傷んでしまったが、捨てることができない。これを手に取ると、彼の在りし日の風貌がよみがえってくる。

副学長 木村先生推薦図書 パート 6

読書という旅に出よう

—公立小松大学で学ぶ学生の皆さんに—

(パート 6)

「カラマーゾフの兄弟」

フョードル・ミハイロウィチ・ドストエフスキー

原卓也訳、新潮文庫（平成28年第77刷）

死ぬまでに一度は読むべき本である。これが最初の正直な感想である。ただこの物語は未完ではないかという疑問が残る。人間存在の本質に迫ろうという意図の基に書かれた、重層的で長大、深遠な物語に比べ、最後のエピソードは結びとしてはあまりに貧弱である。例えば、父親殺しでシベリヤ送りになる長兄ドミトリーを脱獄させる計画がまだ進行中である。無神論的深い思想を持つ、次兄イワンの行く末はどうなるのか。このスフィンクスのような謎めいた人間は果たして狂気を克服することが出来るのか。物語の主人公である三男アレクセイと彼を慕う人格破綻寸前のリーザとの関係は。これら全ての謎が語られることなく物語は突然途切れてしまう。この作品で掘り下げられた問題がすべて答えを持たないことを暗示しているようでもある。それにも関わらず、やはり「カラマーゾフ」は人類の至宝である。

神と人間、教会と信仰、宗教と科学、人道性と残虐性、良心と悪心、人間存在とその深層心理に関わるありとあらゆる問題が取り上げられ、登場人物の会話を通して様々な思考実験が繰り返される。どれをとっても答えのない問題ばかりである。愛情の念が深ければ憎悪の念もまた深くなる。博愛的になればなるほど、周囲の人達への愛情は薄くなる。このどうしようもない二律背反的な不可思議な心理の動きが様々な場面で描出される。これらの重苦しい議論が続く中で、時々深い感動に襲われる場面がある。それは、ロシアの大地に根を張った物言わぬ百姓が示す、ある種の全人格的な知恵、善良さとでも呼ぶべきものに触れるときである。アレクセイの師である長老ゾシマ神父はまさにその知恵を体現しているのである。ゾシマ神父の遺言に従い還俗したアレクセイは、世俗社会の中でこの知恵の布教を託された人物と考えられる。彼は、全編を通して人間のあるべき姿に揺るぎない座標軸を与えている。

「歎異抄」に「善人なおもって往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」という有名な言葉がある。この簡潔な言葉で表現される人間観、世界観が、「カラマーゾフ」にあっては、より立体的、具象的に造形されている。

副学長 木村先生推薦図書 パート 7

読書という旅に出よう

—公立小松大学で学ぶ学生の皆さんに—

(パート 7)

「大和路・信濃路」 堀辰雄（新潮文庫）

「大和古寺風物誌」 亀井勝一郎（新潮文庫）

「古寺巡礼」 和辻哲郎（岩波文庫）

この時期になると、心が落ち着かなくなる。金沢に来てから、年末には奈良に2～3日遊ぶことにしている。東大寺法華堂の諸仏、斑鳩の三つの塔などは、毎年見ても常に惹かれるものがある。斑鳩の里をぶらついて、法起寺、法輪寺、法隆寺の塔が遠望できるところまで来ると、亀井勝一郎のように、「ああ、塔が見える。塔が見える」と言いたくなる心持が良く理解できるのである。今回は大和路のガイドブック的なものを3冊選んでみた。

大和路についての本はたくさんあるが、ここに挙げた3冊は古典といってよいものである。堀辰雄の「大和路・信濃路」は文学者の繊細な感性が感じられ、大変読みやすいものである。浄瑠璃寺の馬酔木の話や古墳についての想像などからは、大和路の春や秋の気配が良く感じられる。亀井勝一郎の「大和古寺風物誌」は、自己の祈りの世界を古寺の堂塔や諸仏に投射しているようなところがある。転向文学者としての生い立ちを背負っているためか、そこには救いを求めようとする真摯な信仰の世界が広がっている。3冊の中では最も心惹かれる。和辻哲郎の「古寺巡礼」は最も世に知られているものであろう。以前読んだ時は、美術史に関する記述が多く、やや難渋で読みあぐねたことを覚えている。しかし、改めて読み直してみると、情緒に流されずに美術史家として学問的客観性を求めようとする姿勢に大変好感が持てた。

さてこの年末はどこへ行こうか。奈良から桜井に向かう国道169号線は、昔は「山の辺の道」に沿う静かな道だった。しかし、今では大分交通量が多くなった。これを南下して帯解の辺りまで来ると、左に円照寺の森が見えてくる。三島由紀夫の「豊饒の海」で重要な役割を果たす寺である。天理を過ぎると正面に崇神、景行の巨大な古墳が現れ、その先に赤松に覆われた三輪山の秀麗な姿が見えて来る。このあたりから、奈良盆地の反対側、右手遙かに二上山もよく見える。法隆寺も良い。いつか拝観に一番乗りし、広い西院伽藍にたった一人ぼつねんとしていたことがある。生駒下ろしに雪が舞う寒い日であった。その時、天空からこの世のものとは思えない不思議な鐘の音が響いてきて、一瞬、上宮王家の惨劇が頭をよぎった。しかし、それは塔のひさしにある宝鐸の奏でる音であることがすぐわかり、現実に戻された。あの宝鐸の響きをもう一度聞きたいものである。